

空手道詳説（12）

第2章 沖縄史の概説

4 沖縄史の概略（その3. 第二尚氏王統の発生）

(1) 金丸と第二尚氏王統の誕生

金丸、後の尚圓王（1415～76年、在位：1469～76年。以下、「尚円」と記す）は、沖縄本島の北西40kmばかりのところに位置する伊是名島（いぜなしま）諸見村（現在の伊是名村諸見）に生まれ、童名は思徳金（うみとくがね）といった。

この島は、面積14km²、海岸線延長16kmという小島で、現在の人口は1500人余であるから、金丸が生まれた頃は100人前後でなかろうかと推察される。

金丸の父は尚稷（しょうしょく、生年不詳～1434年、伊平屋里主と呼ばれた）、母・瑞運の長男として生まれ、父を助けて農業を手伝っていた。

金丸は妻を娶り農業に励んでいたが、数年で20歳のとき両親が亡くなってしまった。弟（尚円の没後、第二尚氏第二代王となる）は5歳に満たなかった。

ある年、村中が大旱魃で難儀しているとき、金丸の田の稲だけが枯れなかったことから、村人から水を盗んだとの嫌疑を掛けられた。このことは、金丸は働き者で器量も良かったため、村の若者から妬みを受け、亡き者にしようとする企みがあったからとの説がある。

非難の目に堪りかねた金丸は、妻と弟を連れて村（島）を出て、国頭村（くにがみそん、沖縄本島の最北端）に渡った。金丸24歳であった。



伊是名島にある尚円王青年期の銅像

国頭村に移住しても、他所者に対する眼差しは冷たかった。1441年27歳のときに国頭村を後にし、都の首里へと向かったのである。

首里に到着すると、金丸は当時の王・尚金福の叔父で越来王子（ごえくおうじ、後の第一尚氏王統第7代王尚泰久）に仕え家臣となった。

勿論、下役からであったが才気に長けた金丸は次第に頭角を表し、1452年38歳の時に黄冠を許されるまで昇進した。黄冠とは、王国の身分上の貴賤を規定した制度で、第二尚氏第3代王の尚真によって、1509年に金銀の簪（かんざし）着用による身分制度を定めたのが最初で、次いで冠と髷（まげ）に関する等級の規定は、1524年に6種の冠による区分がのってきたもので、金丸が黄冠を許されたという時代は未だ制度がなかったため、王府官吏の中で高官であったと後に記載したのだろうと思われる。

いずれにしろ、金丸は仕官から10年余りで王府の高級官僚に抜擢されたのである。

その後、第一尚氏第6代王の金福が55歳で崩御し、跡を世子の志魯と金福の弟（巴志の六男）の布里の間で王位をめぐる争われた「志魯・布里の乱」（しろ・ふりのらん）が起きた。この乱によって首里城は焼失し、志魯・布里の双方が共倒れとなり死んでしまった。



「志魯・布里の乱」後の王位は、第2代王尚巴志の7男で、尚忠王、尚金福王、そして布里らの弟の泰久（1415～60年）が、尚泰久となって第6代王（在位：1453～1460年）を継ぐことになった。

この尚泰久王の誕生について、金丸が関与した経緯については先に述べたが、越来王子と称していた泰久が即位すると、金丸は1454年に西原間切の内間領主に任命された。仕官14年目にして、自らの領地を有するまでに出世した。

伊是名島・尚円御庭公園の御躰所（躰の緒を埋めた所）

金丸はその後も順調に昇進し、

1459年には御物城御鎖側官（貿易長官）に就任した。この職は、同時に王への取次役でもあつたから、王への意見上申は金丸を経由する必要があることを意味した。尚泰久王の信頼が絶大であったこと明瞭である。

しかし、翌年、尚泰久王が45歳の若さで薨去してしまうと、泰久3男の尚徳が第7代王として即位する。

血気にはやる若き尚徳王を、金丸が諫めることもしばしばであったが、当然ながら尚徳王と金丸の関係は尚泰久王の時代のようにはいかなかった。

史書には尚徳王の悪政がつづられており、このことは前項にも書いたとおりである。しかし、血気にはやるとの評価は、他者の進言よりも煥発な才気が先んじた結果と観ることができるから、愚鈍のせいではなかったのではと筆者は分析している。

いずれにしろ、尚徳王自ら出向いた喜界島遠征（1466年）後の1468年、金丸54歳のときに官職を辞し領地である西原間切の内間村に隠棲してしまった。

ところが、その翌年尚徳が28歳で病死してしまう。尚徳には4人の男子がいて、官僚中最高位の三司官は世子の着位を提案するも、重臣たちの意見は金丸を次期王と決めた経緯は既に述べた。

突然の王権交替劇について、第二尚氏の公式史書「中山世譜」や「球陽」の記述を要約すれば、『尚徳の世子たちと徳側の武将は、金丸の即位に反対して決起するが、金丸側の軍臣たちは徳側を打ち破って殺した。臣民は金丸を推戴して王とした。この様子を聞いた尚徳側の貴族や近臣たちは先を争って逃亡し、王妃・乳母、世子を擁護して近くの城に隠れるが、兵士が追い掛けてこれを殺した』とある。但し、これらは金丸が指揮したとか指示を出した形跡はなく、実際にどの程度の殺戮があったかも不明とされている。

付け加えるならば、この王権交替については、それ故のクーデターとか両者間が争う衝突がなかったことは確かで、今まで見てきた琉球王国の交替劇と同様に無血革命であった。

(2) 尚円と出生等の疑問

第二尚氏王統は、それまでと違い長期にわたり継続した。金丸が尚円王を名乗り着位したのは1469年で、以降1875年（明治8年）の「琉球処分」（後に説明する）により琉球王国が消滅し沖縄県となるまで、19代406年にわたり王統は続いた。

第一尚氏最後の王・尚徳が病死し後継者選びに際し、王府高官たちは尚徳の世子たちでなく、金丸に対し絶大なる信頼を寄せた理由として、彼は度量が大きく、人と接するに分け隔てなく、識見に優れ、寛容で慈悲深く、実行力に富み、誠実な人柄に期待されたからと分析する。人の心を引きつけ、期待感を抱かせるような人柄が、政情不安の中にあって待望されたタイミングの良さもあったであろう。

ただ、在位7年60歳で崩じてしまったため、第一尚氏王統時代、特に尚徳治世から引き継いだ負の遺産を全面解消するに至らなかったとしても、政情安定への方向に道筋を引いたことは確かといえる。

これまで述べてきた中で、二つだけ筆者が解けない謎がある。

金丸は、沖縄本島北西の伊是名島生まれで、農民出身であると前項に書いた。その上に周囲から妬まれて島を抜け出し、沖縄本島北端の地（国頭村）に逃れ、その地にも馴染めずに首里に辿りついたと史書は記載している。史書とは、「中山世譜」や「中山世譜」、そして「球陽」である。これらは、第二尚氏王統の正史といえるもので、本土でいうならば天武天皇が太朝臣安萬侶（おほのあそみやすまろ）に命じて編纂させた「古事記」や、舎人親王らの編纂になる「日本書紀」と同様、権力側の都合によるところが多いと解釈されてしかるべきかと思う。

その疑問とは以下である。

第一には、尚円の学識度量についてである。

1415年に生まれ、数え年20歳で父母を亡くし、農業に従事して妻と弟を養い、24歳で島を出て国頭村に逃れ、27歳の時に首里に出る。間もなく尚泰久に見出されて仕え、38歳にして高官の一人に列せられ、2年後には西原間切の内間領主となり、尚円王となった時は54歳であった。これが、尚円王の履歴である。

尚円となる金丸が仕官したのは1441年であるから、1372年に初めて明国と国交が樹立されてから70年の歳月が経過しており、学術や文化のレベルは発展し成熟期にあったこと確実である。金丸が王府高級官僚に昇進し、泰久王への取次役を務めたとするなら、単なる度量や才能だけで通用するはずはない。

例えば、王に対して『漢代の故事によれば、かくかくしかじかで……。この問題をOKと裁決するのは如何なものでしょうか』とか、『高麗の歴史によれば云々』、『大和における朝廷失政の原因は……。であり、我が国なら……。策があります』などなどと進言するには、漢語の読み書きができて、漢籍に精通し、広く国際事情に通じていなければならない。少なくとも後の科挙試験（高級官僚の登用試験）合格者を上回る学識が備わっていた可能性がある。島出身で農民という経歴から、何時、何処でこれら素養を身につけたのかは、残された記録から読みとることはできない。

第二に、伊是名島生まれに関してである。

第一尚氏王統の初代王は、前項の(3)「第一尚氏王統の系譜と在位年」のところで触れたように尚巴志の父・思紹(1354～1421年、在位：1406～21年)で、更に思紹の父は鮫川大主(さめかわおおぬし)と伝承にある。鮫川大主は伊是名島に生まれたと記されているので、金丸(尚円)は第一尚氏王統との血縁があったと、暗に系譜の一貫性を示すための根拠としたのではないかという疑問が残る。前述の第一の謎の中で、若き日を無教育で過ごしたのではないのではという疑問と併せ考えるならば、本当に伊是名島生れであったかどうかについて、筆者には解けない謎として残っている。

(つづく)

今月の参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月26日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月1日初版、(株)勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和50年7月25日初版、日本空手道常心門出版部発行
- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012年6月20日初版、(株)河出書房新社発行